

War Robots=A lot of Soldiers Memories=

哭糖

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この作品はPixonic様のスマートフォン用ゲーム「War Robots(WR)」をモチーフとした二次創作作品であり、Pixonic様及びWRとは一切の関係はございません。※

……核の驚異を乗り越えた、近未来。

幾度の大戦によって地上は焼かれ、人類は残された資源を取り合いながら広く小さな戦争を続けていた。

これは、後に戦場の強者となる1人の男が経験した、生命を賭して戦う兵士達の記憶である。

※この作品は「携帯小説モバスペブック」、「E☆エブリスタ」にも投稿していません。

目次

硝煙の先	1
硝煙の先 #2	4
エメリヤンの駒	10

硝煙の先

——アメリカ、サウスカロライナ州 TMC（環太平洋軍事企業体）
チャールストン支部

戦闘前で慌ただしい空気が流れる格納庫に、帽子を深く被った上官に連れられて歩く男がいた。

男の名は「リアム・アンダーソン」。ブロンズの髪と青い瞳を持つ、二十代半ばのコーカソイドだ。

豪壮な勲章を胸に付けた軍服姿の上官は、格納庫の端の方まで辿り着くと立ち止まり、ブーツの底で音を鳴らす。

「君にはこれから、この機体に乗って戦闘に出てもらおう」

上官の視線の先には、リアムの髪と同じブロンズの外装で覆われた二本脚のロボットがそびえ立っていた。

軍の木馬、『Destrier』

「俺に……こいつに乗って戦えと……?」

「そうだ、君はかつてこのDestrierのプロトタイプの実験に参加していたな。その腕を見込んでのことだ」

薄暗い格納庫と帽子の影が合わさり、上官の表情は読み取ることができない。できたとしても、そこにあるのは冷たい無表情だっただろう。

「しかし、俺は……」

「リアム・アンダーソン諜報事務官、パイロットテストに適合していないが、その能力を事務仕事に喰い殺されるのは勿体ないとは思わないか?」

我が国には母国の為と命を張る覚悟があってもロボットに乗れない兵士もいるんだ、誇れ」

上官は淡々とリアムに言い放ち、来た方向に踵を返す。

「君に合わせたパイロットスーツは既に準備されている。

君には、期待しているよ」

——チャールストン市街近郊管理外区

TMC支部からロボット四機小隊で移動を始めて十分。リアムの乗るDestrierは、味方機の後ろで隊列を崩すこと無く周囲の警戒を続けていた。

「敵機影、確認無し」

『ハツハツハー！アンダーソン准尉、そんなに気張ることもねえだろう』
リアムのDestrierの前を進むGl. Pattonに乗った小隊長が、リアムの報告を笑い飛ばす。

『諜報部隊の話じゃ、敵はたった一機だそうだ。わざわざ小隊一つ出す程の任務とも思えんが、お前の初出撃にはちようどいいだろ？アンダーソン准尉』

そう、作戦目標はロシア帝国軍強襲部隊の残存兵力で、確認されているのがたったの一機。

作戦に失敗し撤退すらできなくなった袋小路のネズミ処理という簡単な仕事、隊の誰もがそう思っていた。ただ一人、リアムを除いて。『慎重になるに越したことは無いがな准尉、もう少し肩の力を抜いたらどうだ？その機体のテストに参加したのだからもう二年前になるそうだしな』

Gl. Pattonの上部だけをリアムのDestrierに向け回転させ、小隊長の男は続ける。

『しかしお前も不幸なもんだな准尉、急に呼び出されたと思ったら、いきなりそいつに乗れたのでその日のうちに実戦投入だなんて普通はありえん……』

『ベン隊長、熱源探知しました』

隊長機の後ろを随伴していた隊員のDestrierから通信が入り、一瞬で場の空気が引き締まる。

『距離と方角は？』

『現在距離1050m、南西の方角……隊の右側から接近中と思われ
ます』

南西方向……小隊の右側は廃ビルの残骸が障害物となり、迎撃しやすい地形となっていた。

『マイク、ジョナサン、お前らは俺の側面に付け。射程内に捉えたらすかさずトリガーを引くんだ』

小隊長はガトリング砲「GAU Punisher」を積んでいる僚機と、速射ミサイル「SURAF Pinata」を積んだ僚機、その二機のDestrierに指示を出す。

『アンダーソン准尉、お前は後方支援を頼む』

「……了解!」

これが、この緊迫が戦場。リアムの操縦桿を握る手の力が無意識のうち強くなる。

迎撃姿勢を整えた味方機の後ろで、リアムは来るべき照準の向こうを見つめていた。

『距離700』

僚機のパイロットが言う。

引鉄に指を掛けたまま、静かに待つ。

『距離450』

じわり、じわりと詰まっていく互いの距離。敵機の姿はぼやけながらも視界に迫る。

その時、リアムは見た。気付いた。

”待ち伏せの判断は誤りだった”と。

しかし、緊張と興奮に支配されたリアムの口は、仲間達に事態を知らせることもできずただ震えていた。

『距離300……』

『よし!全機ターゲットロック、撃てえ!!』

前衛のGl. Patton, Destrierが障害物から身を乗り出し、一斉に目標へ銃撃を浴びせる。

薬莖が地面に広がり、ミサイルの煙で周囲は白く包まれた。銃口から出る火花が煙の中で点々と光り続け、耳を裂くような音が繰り返される。

そして、リアムがようやく発射することができた、”後ろに下がれ”という不器用な声は、不躰な銃撃音に掻き消されてしまった。

硝煙の先 #2

全弾撃ち尽くし、空になった弾倉を捨てた音を最後に、辺りに静寂が訪れる。

『……やっぱり大したことない任務でしたね、隊長』

SURF Pinataを装備した僚機のDestrierが未だ周囲を覆う煙の中一步を踏み出す。

その時だった。

白煙と静寂を切り裂いて火薬の音が再度鳴り響き、動きを見せたDestrierが無数の近距離ミサイルによる攻撃を受ける。

機体の全面に爆風を浴びたDestrierは、支えを無くしたように地面に倒れ込んだ。

『……っ!? ジョナサン!』

もう一機のDestrierが沈黙した僚機に近寄ろうと廃ビルの陰から飛び出してしまふ。

『馬鹿野郎! 今動いたら……!』

小隊長の静止も既に意味を成さず、飛び出した機体には容赦なくミサイルが浴びせられる。

脚部に爆発の衝撃が届き、サスペンションを挫かれたDestrier。

動く事もままならなくなった満身創痕の機体に、そいつは煙を纏いながら飛び掛った。

深い緑色の外装を持つロボット、『Rogatkka』

それは膝の装甲でDestrierを蹴り倒し、火花を上げながら地面に伏せる機体の上部を足裏で押さえ付ける。

『し、死にたくない……!』

ロボットに踏み潰される恐怖など計り知れたものではないだろう。

ガッ

Destrierのコクピットを装甲の上から踏み付ける。

何度も。

何度も。

形が大きく変わるほど痛めつけられたDestrierの中がどうなっているのか、考えただけでリアムは胃の中のことを思わずぶちまけそうになった。

そして、恐怖と共に思う。

今自分が乗っているコイツは、無力な自分を守ってくれるモノじゃない。

無力な自分のまま、死へ誘う棺桶なのだ。

『准尉イイ!!』

小隊長からの通信でリアムはなんとか恐怖から逃れ平静を取り戻す。

だが、ほんの数秒のうちに僚機が二機も破壊されたという現実は変わることは無い。そして、次は我が身であるということも。

『ボサつとしてる場合じゃねえ！ヤツに向かって全弾ぶつ放せ!!』

そうだ

倒すべき目標は目の前にいる。そして、それを墮とすことができる武器を今手にしているのだ。

モニターに映る照準をRogatakaに合わせ、トリガーレバーを引く。

リアムのDestrierの右側に装備された機関銃「AC Molot」が勢い良く弾を撃ち出した。巨大な撃針が雷管を穿ち、その衝撃と轟音はコクピットにいるリアムの心を強く揺さぶる。

それは、仲間を討たれた激情によるものか、あるいは相手を殺すという決意を決めた事によるものなのか。

リアムのDestrierが左側のAC Molotを、小隊長のGl. Pattonが側面のGAU Punisherを、それぞれRogatakaに撃ち続ける。

Rogatakaの両側に備えられている兵器は”R4OM Orkan”

「嵐」と名付けられた箱状のそれは、SURAF Pinata同様小型ミサイルを毎秒10発の速さで吐き出し、瞬く間に対象を破壊するものである。

SURAF Pinataとの最大の違いは、発射中にも次弾の装填ができることだ。これによりリロードを待たずとも再装填が間に合わなくなるまで撃ち続けることができる。

ただ、R4OM Orkanにも弱点はあった。

それはリアム達の銃撃に曝されているRogatakaが、銃弾を避けようとするばかりで撃ち返さないことから読み取ることが出来る。

R4OM Orkanの小型ミサイルは極めて射程距離が短いのだ。

SURAF Pinataもそうだが、これに搭載している弾頭は一発の威力ではなく連射速度や装弾数、弾頭の軽量化を優先したものの。

従って一つ一つのミサイルに積める推進剤の量が少なくなり、結果として射程わずか300mという状況を選ぶ兵器となった。

この事を、リアムは諜報部にいた頃に知り得ていた。

これを伝えることができていれば僚機のDestrierは墮とされることは無かったのかもしれない……

しかし、今は後悔の念に駆られている場合ではない。

R4OM Orkanの特性を知っている自分だからこそ、やられた仲間のためにもこのRogatakaを破壊しなければ……

リアムの鼓動は、未だ激しく高鳴っていた。

リアム側の優勢。R4OM Orkanの射程圏外からの機銃による攻撃の全てを避けきけることはできずに、深緑の外装が少しずつ傷付いていく。

だが、Rogatakaが一方的に撃たれ続けた時間はわずか10秒にも至らなかつた。

平地で姿勢を整え、両脚部を揃えると背面のブースターを起動させ勢い良く地面を蹴り出し空中へと跳び上がる。

「ジャンプドライブ」……一部のロボットに搭載されている、文字通り機体を跳躍させる機構を持ったユニットだ。

それによって、Rogatakaはリアム達との距離を一気に詰め

る。

R4OM Orkanの砲口を下げ、飛びかかったのは小隊長のGl. Patton。

隊長機の性能上、この距離での回避は不可能であった。

『みすみすやられてたまるかよおおおお!!』

側面のGAU Punisherガトリングの斉射を続けながら、機体上部に装備されたCRV Pinを前方の空から迫るRogatkkaへと撃ち放つ。

いくら機動力と高火力を兼ね備えたRogatkkaでも、ジャンプドライブを使用し空中にいる状態では無防備になる。

放たれたCRV Pinの弾頭は直線に続く煙の尾を描きながら、Rogatkkaの機体上部に直撃した。

装甲も一部が吹き飛び、鈍く光る機部が顕になる。それでも、なおRogatkkaは迫る。

爆発による煙を纏いながら、ついに小隊長のGl. Pattonとの間合いを詰めた。

2つのR4OM Orkanが、推進剤の燃焼が生み出す音と共に弾を吐き、それを隊長機に打ち付ける。

その様はまさしく嵐の如く。

『……尉……あと…………お前が……!!』

小隊長からの、最期の通信。

リアムはAC Molotのマガジンを捨て、もう片側に装備された追尾ミサイル「AT-Spiral」のロックオン画面がHUD上に映し出され、すかさずトリガーを引いた。

3発の弾頭が射出され、満身創痍のRogatkkaを襲う。回避を行おうとするも避けきれず、AT-Spiralの弾頭は武器の接続部近くに着弾。運良く左側のR4OM Orkanをはじき飛ばす。

しかし、戦闘は終わってはいない。

装甲が剥がれようと、武器をもがれようと

Rogatkkaは動く、戦う意思を見せる。

剥き出しの機関部からギシギシと音を鳴らし、ファイティングポーズ

ズを取るが如くリアムのDestrierへと向き直った。その姿は見えないはずのパイロットの強い思いを写しているようにリアムには感じた。

「生きたい」のだと

片側だけ残ったR4OM Orkanだけでもリアムの驚異であることに変わりはない。1歩ずつ迫るRogatakaにとどめを刺すべく、操縦桿を強く握り締める。

だが、リアムにとって予想外の出来事が起こった。

ゆつくりと接近していたRogatakaが、突如前のめりに倒れたのだ。

操縦ミスか？あるいは、既に戦える状況ではなかったのか？

しかしそのどちらでもないというリアムは即座に悟る。

それは倒れ伏せたRogatakaの背面が全て物語っていた。

ずっと真正面から撃ち合っていたはずのRogatakaの背部が見るも無残な程ポロボロになっている。恐らく熱量の非常に高い武器によるものであろう、装甲の一部が赤く溶けて歪んでいた。

リアム以外の何者かの攻撃、そう察せざるを得ない。

一体誰が……

『ステルス機能というのは、確からしいな。この機体』

突然リアム機に入った近距離通信。

至近距離でないで接続できないその回線に割り込んだ人物の機体を、Destrierの上部を動かし、そして見つける。

位置はリアムの真後ろ。

Destrierと大差ない大きさの、流線型の装甲を光らす蒼いロボット。かつて諜報部に属していたリアムですらその機体の正体がわからない。

しかし、リアムは直感的にRogatakaに止めを刺したのはこの機体だと悟った。両側にRogatakaの背中を焼いたであろう試作品と思われる銃器が備え付けられている。

だが、センサーにも掛からず、Rogatakaが倒れてからの数秒の間に機体の後ろに回り込むことができるこのロボットの性能は未

知数。この距離で戦闘になったとして、勝てる方法が見出せなかった。

『怯えているのか知らないが、今はお前を殺す気は無い。とはいえ抵抗はするなよ、これ以上十字架の前で懺悔する回数が増えるのは面倒だ』

不明機から再度通信が届く、男の声だ。

『ここでの我々の任務は終わった。まだ気味の悪い存在だとか思われていないようだが、いずれ世界と相見えることになるんだろう。お前はどうかだろうか？』

「何の……話だ……？」

『……口が過ぎた。帰還する』

そう言い残し、背を向けその場を去ろうとする蒼い機体。

「ま、待て！お前は……お前らは一体何者だ……？」

『ADTWとだけ、言っておこう。世界を変える存在だ』

エメリヤンの駒

——ロシア帝国領旧独房施設

人の気の無い、月明かりだけが照らすその建物から、静かに足音だけが聞こえている。

淡々と並ぶ無人の部屋の中、唯一閉じられている独房の前で、その足音は鳴り止んだ。

「オルゲルト・カラシコフ、出所の時間だ」

「……元々、書類上じや投獄されていない身だけどな」

所々錆ができた古い鉄格子が、軋む音を暗い独房中に響かせながらゆっくりと開く。同時に、無手入れの髭を生やしたやつれた様子の男が独房の暗闇から姿を現した。

「今更どうい風吹き回しだ？」

髭の男が、鋭い目つきの奥にあるエメラルドの瞳を、牢屋の前の男に向ける。今まで鉄格子に閉じ込められていたとは思えないような生気に溢れた目だった。

「インペラトリーツアから直々のご指示です。」前線に復帰せよ、溪谷のサヴァアの異名に期待する」と

「……」

「あなたの機体は用意されています、後ろを」

指を差したのは独房の窓。

僅かな光しか通す事の無い小さなその窓を覗き込めば、收容所の広い敷地にそびえ立つ影が一つ。

「……軍上層部がイカれてるのは知っていたが、ここまでとはな……」

——TMC大型航空輸送艦「C1—05b Vedfolnir」

パイロットスーツに身を包んだ状態で集められた兵士達は、指揮官から作戦前ブリーフィングを受けていた。

艦内の壁と一体になっているブリーフィングモニターに映し出される情報に目を通しながら、指揮官の説明に耳を傾ける。

「……今回の目標を再度確認する。目標は、キューバ基地を占領しているロシア帝国強襲部隊の排除。基地への被害を最小限に抑えるために爆発物の使用は厳禁とする。」

後方支援部隊が後ほど到着する予定だが、戦闘が長引けばそれだけ基地の被害が大きくなる。迅速に作戦を遂行せよ」

『了解！』

声を揃えてそう応え、パイロット達はモニター前の指揮官に敬礼する。

その中には、初陣後わずか数日の初々しい右手を額の上に掲げるリアム・アンダーソンの姿があった。

……

「アンダーソン准尉」

格納庫へと向かうリアムを、後ろから優しく呼び止める。

声の方に振り返ると、赤みがかかった髪を肩まで伸ばした、リアムの胸の高さ程の背丈である女性が立っていた。

着こなしているにも関わらず裾がダボついている軍服はどうやらサイズが合っていないらしい。

「君は……」

「あつ、申し遅れました。今作戦にて分隊のオペレーターを務めます、『アン・フローレス』です。」

……私のこと、覚えていらつしゃいますか……？」

姿勢を正し右手を上げ敬礼を行なうと、リアムの方をすう、と上目に向いた。

「士官学校通信科の『赤毛のアン』か」

「もう、その呼び名やめてくださいよ……」

お久しぶりです、リアム先輩」

かつて慕っていた人物との再会に、アンは思わず笑顔を綻ばせる。「ところでリアムせんぱ……アンダーソン准尉は諜報部に所属なされていたはずでは？」

「……上官命令で数日前急に所属が変更された。Destrierのプロトタイプテストの経験があるからとかで強引にな」

幾多の大戦で大きく人口を減らしたこの世界では、人員が不足することが多々有りうる。

なので、最初は驚いた様子のアンだったが、リアムの話に対して「そうですね……」と言葉を返した。

「つと、もうすぐ作戦開始時間でした！急にお呼び止めしてすみません。」

作戦遂行と無事のご帰還、私も全力でサポートいたします。頑張ってくださいね」

そう言つて、アンはもう一度敬礼をしなおしリアムを見送つた。モニターの光だけが照らす密室で、リアムは小さく息を吐く。

今日、これからこのコックピットの中で命を落とすかもしれない。生きて帰れないかもしれない。

最悪のイメージをするのが駄目なことくらいリアムとて理解をしていたが、この狭い世界に閉じ込められるとそのことを考えざるを得なくなる。

『こちら、Vedfolnir。オペレーター、アン・フロレスです。本艦は現在作戦空域を航行中、部隊の投下地点を確認後、本艦を降下させDestrier 6機を投下します』

先ほどとは違うハキハキとした口調で、機内にアンの声が響く。

その通信の音が終わるとほぼ同時に、大きな揺れと共に足元のハッチが開くのがモニターに映し出された。

『……これより、キューバ基地奪還作戦を開始します。ご武運を』